

桜



www.columnland.net

風が 吹く

桜の花びらが、
ゆらゆらと舞う

やがて花びらは

地上に落ちる

地面に桜が

咲く

歩く

美しき桜並木を

自然と心が踊る

なにか楽しい事

に出会える

予感

夢

の 始まり

願うだけでは叶わ

ないから、進むのだ

ここから描く、自分

だけの最高の物語

プロローグは桜

に彩られた

さあ楽し

もう

春風を告げる始まり

夏にどんなに着飾って

ここにいろよとアピールしても

誰一人として振りむかない

秋にどんなに薄着をして

こちらを向いてとイメチェンしても

誰一人として気がつかない

冬にはさすがに寂しくなつて

空を見上げて思うんだ

僕はもうみんなに嫌われたんだ

ここに居てはいけないんだって

だから春になつて

みんなが遊びに来てくれると

僕は頬を桃色に染めて喜べる

ああ

僕はここに居ていいんだなあって

そんな僕サクラの一年

色を重ねる。何度も重ねる。そして、そこに自分だけの桜を表現する。キャンパスに描かれるのはまさに自分の心、なのだろう――

桜の花びらが舞う季節に

僕はこの春、晴れて大学生となった。勉強は苦ではなかった。迷ったのはどの大学を受験するかということだったけど、決め手となったのは、この桜並木だった。絵が好きなら僕にとって、この風景は何としても描いておきたかった。他の人からしてみれば、くだらない理由に思えるかもしれないが、僕にとっては十分過ぎる理由だ。

緩やかに流れる時間の中で絵を描いていると、聴き慣れた声がした。

「おー。やっぱりここにいた」

高校で同じクラスだった女子だ。彼女もどうやらこの大学に合格したようだ。

「久しぶり。卒業式以来かな？」

黙々と絵を描きながら、そんな他愛も無い返事をする。その後は、お互いに合格おめでとうとか、どここの学部？とか、そんなありふれた会話が交わされた。しばらくして、ふと彼女が呟く。

「ねえ、どうして私がこの大学を目指したと思う？」

筆が止まる。僕はその問の答えを知っていた。

「……桜が綺麗だから？」

だから、僕はあえて間違った答えを口にした。そしてぎこちなく、また筆を動かす。

「アンタじゃないんだから、そんなわけないでしょ。」

……アンタがこの大学目指すって言ったからよ」

彼女の声は震えていた。でも、僕には返す言葉がなかった。だから黙って絵を描いていた。

「好き……なの」

彼女が言葉を繋げる。再び筆が止まった。勇気を出して発した彼女の言葉。素直に嬉しかった。でも、僕は……彼女のことが好きなんだろうか？興味はある。綺麗だし、性格も明るくて一

緒にいと楽しい。でも、僕の好きは彼女の好きと比べるとずいぶん小さなものに感じてしまう。もし、僕が好きだと言えば彼女と付き合うことになる。でも、彼女の好きに応えられないことの罪悪感で自分が潰れてしまうような気がした。

「誰かに好きになってもらえるほど僕は立派な男じゃないよ」

だから誤魔化す。思えば高校の頃からそうだった。彼女の気持ちに気づいていないフリをしてきた。それが彼女のためだと思って。

「別にそんな答えは求めてないの。私が知りたいのはね、アンタが私を好きか嫌いかってこと」

迫ってきた彼女は、泣きそうな顔をしていた。

「好きか嫌いかで言えば、好きだけど……」

彼女の迫力に負けて出た曖昧な「好き」という言葉。ふと自分が情けなく思えた。しかし、少しの安堵からか、彼女は攻撃の手を緩めなかった。

「うん、良かった。でもわかってる。アンタが何考えているか。だから、命令ね。私が傷つくようなことは言わないこと。その代わり、私がアンタをメロメロにしてやるからねっ」

完全にやられたと思った。彼女は僕以上に僕の性格を理解していたようだ。もはや「うん」と頷くしかなかった。とは言え彼女も自分の科白に恥ずかしくなったようだ。

「だ、だから、その……わ、私のこと、もっと好きになつてくれると嬉しいな……」

耳元で囁かれるささやかな願望。顔は真っ赤。照れを誤魔化すために言葉を続ける。

「ま、まあアンタも景色ばかり描いてないで、たまには人物も描きなさいよ。ほら、私がモデルになつてあげるからさ」

そんな彼女を可愛いと思う僕がそこにはいた。

一人の女の子がキャンパスに新たな彩りを加えていた。ふと思う。桜の花びらがすべて落ちてしまえば、僕も恋に落ちてしまうのだろうか、と。

天国と地獄

それは勝者と敗者の違いと言っても過言ではない。

桜、咲くさ、落差

上から見ても下から見ても
上から読めど下から読めど
上からの差も下からの差も

結局一緒だよね、っていう話。

桜の咲くころに

再会を約束した

君はもう…

桜の正しくない愛で方

「おおつ、こども桜が綺麗だな」

「そうだな。『こども』って言うことは別の場所でも桜を見てきたのか?」

「そうそう、先日花見してきたんだよ。楽しかったなあー」

「はあなあみいだあとおー!?」

「えつ、あつ、うん。それが何か?」

「貴様、桜を見てどう思った?」

「えつ、綺麗だなーつと」

「それだけか?」

「うん、まあ。あとは基本的に酒飲んでたし」

「貴様それでも日本人かあ!!」

「うるせえな。花見なんて結局酒を飲んで騒ぐ口実みたいなもんだろ。」

「日本人なら、もっと風流に桜を愛でみたらどうだ!?」

「声デケエよ。まあでも確かに桜の愛で方なんて知らないかもなあ。

参考までにどんな風に桜を楽しめばいいか教えてくれよ」

「ふふ、お前がそこまで言うなら教えてやろう」

(メンドクセー)

「まずこの花弁を見る。なんと5枚ではないか」

「はあ、そうだね」

「貴様、5という数字に感動を覚えないのか!!」

「いや、まったく」

「フィボナッチ数だろうが!!自然界は数学によって支配されているのだぞ?考えてみる、四つ葉のクローバーが稀少なのはフィボナッチ数でないからだろ。ちなみにクローバーの葉の枚数の世界一は現在56枚。次点は33枚だ。ぴったしとまではいかないが、フィボナッチ数の55と34に近い値となっている。どうだ、素晴らしいだろう。ちなみにどちらも日本で発見された。おっと、話が逸れた、桜の話だったな。5という数字に戻るが、この花弁が描く五角形。思い浮かべることは一つだな?そう、黄金比だ。辺と対角線は黄金比をなす。もちろん、フィボナッチ数と黄金比は切っても切れない関係があるのだが、実は植物と黄金比も切っても切れない関係にあるのだ。見てみる、枝が生えている向きを。幹を中心として枝と枝との角度を測ってみると(中略)そういうえば、フィボナッチ数と黄金比がどうして切っても切れない関係にあるか言っていなかったな。黄金比とは、二次方程式 $x^2=x+1$ の解の(後略)」

「悪かった。俺はどうやら非国民だったようだ。だから話すのをやめてくれ」

桜の木の下で。

そうだ、死のう。

そう思い立った時、あまりの違和感のなさに、笑いが込み上げた。

ふと見上げた桜の木は本当に大きかった。

桜の木は僕を見下していた。

そして不思議なことに、一本の枝から誘うように、先が輪っかになっている縄がかけがあった。そこが、僕の特等席のような気がしてならなかった。

僕はおもむろに、どこにでもあるようなナイフを取り出す。

——昨日は雨が降っていた。

手元でナイフを走らせ、地面に飛散した液体は、踏まれた挙句雨水を含んで黒ずんだ桜の花弁と大して違いは無いように思われた。

きっとこの赤い液体も、何ヶ月……いや、何日もしない内に踏みにじられ、跡形もなくなるのだろう。

それが、何故だか無性にむなしかった。

記録になんて残りたくない。記憶に残るなんてまっぴらだ。誰にも迷惑がからない形で……けれど、矛盾するようだけれど、印象に残る最期が理想だった。

なんとか登れないか、と桜の幹に手をかけると、人為的な傷が手に触れる。

そこに彫られたものは文字に見えた。それをゆっくりと解読したところで、僕は腕をだらんと垂らし、頬に伝う熱いものに気づく。

そこにあった他愛のない言葉で、僕は救われていた。死ぬ気合いも自傷する勇氣も無いハタレに、あつらえたように用意された言葉。

その言葉に共感した誰かによって、文字の横にはいくつもの傷跡がついていた。

僕はその手のナイフで、桜の木を傷つける。

……死んでる場合じゃねえ！

桜の季節がやってきた——とはいえ、一体桜の季節とはいつのことを指すのだろう。

桜の花は、咲いたかと思えば、その栄華は数日と持たずに散華する。

けれど確かに、周囲の景色のように、僕の桜は咲き乱れていた。

今日僕は、めでたく同じ学校に入学した幼馴染……凄く可愛い女の子なんだけど、その子とこの大きな桜の木の下で待ち合わせている。今しかないと思って彼女を呼び出した。察してくれる人もいるだろうけれど……告白するんだ。

緊張して下を見ると、桜の花びらに混じって赤い液体がこぼれ落ちている。靴で触ってみると、その適度に粘性を持ったそれがケチヤップだと分かった。もしかしてここで誰かが花見でもしていたのだろうか。

今度は空を仰いでみた。

そこには先が輪っかになった縄が下がっている。手を伸ばせば届きそうなそれは、きつとその縄を使って、桜の木に登りやすくするための遊具なのだろう、と思った。

そして、再び正面を向こうとしたところで、視界が暗転する。目元に暖かく柔らかな手のひらの感覚。

身近でこんなことをする人……女の子を、僕は一人だけ知っていた。

彼女の名前を告げ、振り返る途中に、桜の幹に文字が刻まれているのが目に入った。

『今日、ここからはじめよう』

その文字の横には正の字がいくつも刻まれていて、その言葉に勇気づけられた人が大勢いることが分かった。

そうだ、ここから始めよう。

そして、僕たちもここに印を刻もう。

そう誓って、僕は彼女と向き合った——。

「春」

まだ肌寒い風が吹く中、

咲いた桜が春を告げた。

いつか散る花を見て

今の大切さを知った。

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
A01	始まりを告げる春風	18 pt	2 位	0 sp
		風を感じさせるレイアウトが光ります。 美しい光景をただ眺めるというのではなく「歩く」という単語を放り込んだことでフレーズたちに動きが備わって、始まりの気分、フレッシュに演出していただきました。 トップに置かれる、いわゆる「表紙作品」には、こんなさっくりポエムやレイアウト派がよく起用されます。教室入って真っ先に自分の作品が目についたら、うれしいよね。狙ってください。 自分の作品を踏み台に銀メダルのねっしーでした。おめ。 イチオシフレーズ：「地面に桜が咲く」×3 「願うだけでは叶わないから、進むのだ」×2 計5班より		
A02	そんな僕（サクラ）の一年	25 pt	1 位	0 sp
		一年のうちで、ひとときだけ熱く注目される。それでもじゅうぶんにうれしい。待って待って待って、3つの季節をずっと待ち続けたからこそ、今の幸せがほんとうにうれしい。 桜を語っているようで、それは「僕」。しっかり人生観につなげていただきました。 首位とともに、今週のイチオシフレーズ大賞もgetです。おめでとう!!! イチオシフレーズ：「僕はここに居ていいんだなあって」×3 「僕は頬を桃色に染めて喜べる」×3 「僕（サクラ）」 「誰一人として振りむかない」 計8班より		
A03	桜の花びらが舞う季節に	8 pt	4 位	0 sp
		「アンタ」ですか、そうですか。大甘ストーリー、練達の書き手さんにより提供です。ツ〇デレ（←100万人コード違反用語）、みんなの深層願望を容赦なくカタチにして、もう読み手のほうが赤面しそうな恥も外聞もない王道ど真ん中展開でした。 「メロメロ」フレーズが大ヒットでしたね。 ときに桜と彼女、描くのはどっちが難しいんでしょ。 イチオシフレーズ：「だ、だから、その……わ、私のこと、もっと好きになってくれると嬉しいな……」（cv.釘宮理恵）「その代わり、私がアンタをメロメロにしてやるからねっ」×4 「好き………なの」 計6班より		
A04	桜、咲くさ、落差	9 pt	3 位	0 sp
		ラストは言葉遊びでどうぞ。 受験を終えたばかりの読み手さんに、しっかり照準合わせて提供です。 たぶん、ほんの僅かの差で、今、ここにいる。そのことの重さ、余白から読みとりたい。		

1 行の幹をくっきり立てたら、あとは極力そぎおとして、シンプルにすっきり見せるのがこのスタイルのポイントです。
イチオシフレーズ：「結局一緒だよね、っていう話」

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
B01	桜の咲くころに 再会を約束した 君はもう…	13 pt しずかなナレーションで聴きたい。 長編ストーリーの始まりのような。 明朝体って威儀を正して向かい合いたくなるような、背筋の伸びる趣がありますよね。 フォントは文字の第一印象。デフォルトのメイリオばかり使ってないで、ぜひ、たくさん試行錯誤してください。 イチオシフレーズ：「君はもう…」×2 「…」計3 班より	3 位	0 sp
B02	桜の正しくない 愛で方	12 pt 出ました、リケイトーク。 フィボナッチ以下のちっちゃい文字を読み飛ばすか、なめるように読むかで、あなたが文系か理系かが分かります。 イチオシフレーズ：「貴様、5という数字に感動を覚えないのか!!」「フィボナッチ数だろうが!!」「自然界は数学によって支配されている」計3 班より	4 位	0 sp
B03	桜の木の下で。	16 pt あざやかな構成力です。 シチュエーションが異なると、同じ言葉が全く違った意味を放って輝く。ケチャップ・首吊り縄と小道具で遊びつつ、言葉の深淵にまっすぐ突っ込んでいただきました。 ヤン○レ（←100万人コード違反用語）専とかグロ担当とか蔑まれつつ、言葉の魔力を熟知しておられる作者さんの心憎い演出です。シルバーメダル&今週のイチオシフレーズ大賞もgetです、おめでとう!!! イチオシフレーズ：『今日、ここからはじめよう』×4 「そうだ、ここから始めよう」「……死んでる場合じゃねえ!」×2 「幼馴染……凄く可愛い女の子」計8 班より	2 位	0 sp
B04	春	19 pt 眩きのような、さりげないフレーズたち。 けれど、今年の春のできごとたちの重みを含んで受けると、「今の大切さ」がずしり。 それをしっかり受けとって首位に押し上げたフロアもなかなか。 おめでとうゴールドメダル!!! さあ、歩き始めましょうか。 イチオシフレーズ：「いつか」「今の大切さを知った。」×3 「いつか散る花を見て今の大切さを知った。」「咲いた桜が春を告げた。」計6 班より	1 位	0 sp